

八中3年人権だより

徳島市 八万中学校
3年生 第23号
2024年12月 2日
編集・文責 吉成正士

実な、ただ懸命な姿が見えるから、やはり感動するので。それは決まりきった言葉ではなく、自分の本当の思いだったり、生き様だったりします。様々な人権課題を通して、その人となりが見えてくるから感動するのです。言い換えれば、「熱」です。そこに「熱」を感じるから、共感するし、影響を与えるのだと思います。やはり人間が大切にすべきは、時代がどう変わっていても、それでないかと思います。



あなたがいたから私がいる

■中学校生活最後の人権集会を終えて、今回は今までのこと、自分の周りの人のことをふりかえれた。吉成先生のお話しや発表を通して、私にとって大切な人を考えてみると、もちろん家族やたくさんの友人を思い浮かべる。私にはその中で一人、この人だけとはいう人がいる。

中学生になり、人前であまり涙を流さなくなった。でも一度だけ、一人の友人の前で今までにないぐらい泣いてしまったことがある。でも、その子はずっととなりにいて、「大切な人が泣いているから私も悲しいよ」と一緒に涙を流していた。最後には二人で爆笑するぐらい気持ちを軽くしてくれて、次の日も心配だからと会いに来てくれた。私はそのとき、こんなにも私のことを想ってくれていることがすごくうれしくて、大切にしてくれるこの友人を私も大切にしよう、この友人の悩みは誰よりも向き合おうと思った。布川先生のお話で、人は失ってから気づくとあった。「失う」とはまた違うけど、いつものように日常を過ごすだけでは、私はこの友人の大切さに気づけなかったと思う。「やさしくしたら、やさしくされる」のように、友人が私を大切に想う気持ちが伝わったから、私も同じように友人を大切に想う気持ちで返そうと思った。私はこれからも友人を大切にしていきたいし、人のやさしさや誠実さを忘れないようにしたい。 6組MH

何か、感動です。うれしいです。こんな仲間関係があることが、本当にうれしいし、ホッとします。

皆さんを見てみると、どこかクールでドライな感じがして、笑ったり喜んだりする場面はよく見かけられるのですが、悲しみや感動で泣く場面はあまり見かけないような気がしていました。どこか冷めたような、感情を表に出さないようにしているような気がしていました。も

っと泣いていいのに、と思うことがよくありました。恥ずかしいのかもしれませんが、人前で涙することを抑えるのかもしれませんが、でも、喜怒哀楽があつて人間です。楽しいときやうれしいときに笑ったり喜んだりするように、悔しいときは怒り、悲しいときは泣くものです。それが人間です。だから、この感想を読んだとき、うれしくて感動しました。こうであってほしいなと思います。もちろん涙腺が緩い人も緩くない人もいるでしょう。それも個性です。でも、泣きたいときは、泣くことです。それで解決はしないかもしれませんが、泣くことで気持ちが晴れやかになることもあるものです。友人、大切にしてくださいね。



好きで誇りをもっている、大切な居場所

■僕は今回の全体学習を受けて、自分にとって「ふるさと」とは何なのか、それと今まで支えてきてくれた家族への気持ちだつたりを考えました。まず僕にとっての「ふるさと」とは、自分の生まれた場所であつて、人生で変更できないものの一つだと思います。僕はこのことから、部落差別をあまく見ていたと思いました。理由は、自分の生まれてきた場所は人生で変えられないのに、そのことについて言われたりする差別とわかったからです。僕の家族はみんなとてもパワフルで、ワイワイした感じです。僕はそんな家族が大好きですが、最近母に部落差別の話をしたときに、母は「私たちも部落出身じよ」と軽く笑いながら言いました。僕はとてもびっくりました。今まで遠い存在だった「部落」というものが、今の一瞬にして目に飛び込んできた感じがしました。僕は母に、「何でそんな軽く言えるの？」と聞くと、母は、「あそこの地域が世間から部落と言われていても、私にはたった一つの居場所でもあつて、ふるさとでもある場所、あそこが好きで、誇りをもってる」って言っていました。僕はそんな母の話を聞いて、吉成先生の話がちよつと分かったような気がしました。 4組TM

初めて私に声をかけてきたときは驚きでした。
「先生、〇〇って部落ですか？」

「なんで？」

答えにはなっていませんが、そこには、「どうしてそんなことを聞くの？」という意図が込められていること

を、彼は理解します。そこで初めて、お母さんとのやり取りを話し始めるのですが、聞いていてうれしく思いました。私が一貫してずっとと言ってきたことはこうです。「ふるさとは誰にでもあり、誰にとっても尊いもの。それをとにかく言う方が絶対的におかしい。素直にみんなが自分のふるさとを言い合えばいい。みんなが自分のふるさとを懐かしく誇りにすればいい」

教員生活のすべてを、部落問題にかかわり取り組んできました。被差別部落出身の教え子も何百人何千人といえるでしょう。その子らは、今も生まれ育ったふるさとにいます。就職で、結婚で、家の都合でふるさとを離れた子も当たり前にたくさんいます。そんな子たちが今どうしているか、気にならないわけがありません。みんな普通に、当たり前に、幸せに生きていればいいのですが、どうでしょう。特に部落ルーツを我が子に伝えられているかどうか、そのことが気がかりでなりません。

「恥でもないことを恥じるとき 本当の恥となる」

部落に生まれたことは、恥ずかしいことでも差別されるようなことでもありません。むしろ、日本の伝統的な文化や技能を発展・継承させてきた、誇りある生き方をしてきた先人となる人々です。その歴史を知らずに差別することは、日本に生まれ育った自分自身を否定することになります。

とはいえ、この社会には、すぐに他人をのけ者にしたり、人を見下して優越感に浸り、少しばかりでも上に立とうとするような情けない人がいることも事実です。そんな社会の負の部分を感じ取り、自分の被差別部落出身というルーツが言えないままに、ふるさとを出て暮らしている教え子もたくさんいます。

言わない方が悪いのでしょうか？

言えない環境を作り出しているのは誰でしょうか？だから今回、お母さんが自分の思いを素直に伝えたことは、当たり前だけどすごく素敵なことだし、私にとってはすごくうれしいことだったのです。

部落差別だけではなく、障がい者問題も、ハンセン病問題も、当事者が身の周りにいないという前提で語られることがよくあります。部落ルーツも、親が伝えてないだけ、本人が知らないだけで、どこにでもいるし、どの中学校にでもいるのではないかと思います。もしかするとそれはごく身近な友達かもしれないし、自分自身がそうであるかもしれません。それは今回の全体学習でみんながよく理解したと思います。つまり特別なことではなく、ごく自然なことだということです。だからといって、恐れたり怯えたりする必要はありません。差別自体がおかしいわけですから。そのことを常に頭において、様々な人権問題に向き合っていくことです。それが、人間として下らない生き方ではなく、真に互いを尊敬する生き方につながっていくのだと思います。



大切なものを失う前

■今回で中学でやる全体人権学習が最後だと思うと、とても寂しいです。中学生になる前までは、人権学習でこんなに深く考え学んできませんでした。だから最初の頃は、人権学習を正しく「めんどくさい」と思っていました。でもやっていくうちにそんな思いは薄れていきました。それは前回の全体人権学習の中での発表であった、人と関わるのを好きになれたからだと思います。人権学習をしていると、相手の今まで知らなかったこと、思いが知れました。また、相手のことだけではなく、自分のことについてもよく知ることができました。そんな人権学習を3年間学んできて、成長することができて良かったです。今までたくさんの議題について考え、たくさんの人と話し、意見を交換し合ってきたけれど、振り返ると、人権学習を通じて話すようになった友達、より仲良くなった友達もいて、「知る」ことの大切さもよく感じます。布川先生や西浦先生が今日おっしゃっていたように、大切なものを失う前に気づき、残り少ない中学校生活の一日一日を大切に、後悔のないような大切な思い出を沢山つくっていこうと思います。 2組KY

もし自分が受けたような人権学習がなければ…、「めんどくさい」ままだったかもしれません。それは私だって同じです。たまたま心に残る、これからもやっていきたいと思えるような人権学習に出会えたからこそ今があるだけです。今も「めんどくさい」と思っていた可能性はあるのです。そう思うと、今もなお「めんどくさい」と思っている人たちを責めることはできません。それは、そうになっていたかもしれない自分だからです。人を責めるのではなく、居心地がよいと思える人権学習をどう自分から発信していくのか。それが、自分が自分に課した課題です。

「今日という日は二度とない」

いつなくなるかもしれない命です。なら、勉強をしても何をして、何の意味もないように思えます。それでも人は前に進もうとします。なぜか。それは、自分に納得できるような生き方がしたいからだと思います。先生や家族や、他人から評価を得るために生きるのではなく、自分で自分に納得できる生き方をしたいがために、自分のさらなる前進を試みているのではないのでしょうか。何もしなくても明日は来るでしょう。でも、「昨日より今日の自分が好き、今日より明日の自分が好き」、そう言える「今」を大切にできる自分をめざしていければと思います。

(次号でおしまい)